

農園を訪ねて<その7>

真鶴で考える、地域の在り方

前号（AAINews125号）で紹介した、神奈川県足柄下郡真鶴町にある「田ノ倉農園」を訪問したのち、我々は引き続き同僚の案内のもと、真鶴の町を散策した。

移住者が集まる小さな町

神奈川県で2番目に面積が小さい半島の町。過疎法では、県内で唯一の「過疎地域」となっている。真鶴はそんな小さな町ながら、近年は、ここに惹かれてやってくる人、特に若い世代の移住が増えているという。今回我々が訪問した「真鶴オリーブガーデン」の山平ご夫妻や、地域交流サービスを提供する「ロッキンビレッジ」代表の山下氏も近年移住された方々であったし、最後に訪れた酒屋「草柳商店」は、来訪者や移住者が集まるハブ的な存在となっていた。一体、この町の何が人々を惹きつけるのであろうか。

新しい動きを生み出す人々

「真鶴オリーブガーデン」では、2019年から、生産者の高齢化などにより管理の行きわたらなくなった遊休ミカン畑をオリーブ園へと転換し、「安らぎのサードプレイス」をコンセプトに、交流の場づくりを展開している。栽培したオリーブの葉は、お茶やお菓子に加工するなどして、真鶴の温暖な気候を生かした、オリーブという新たな作物を地域に根付かせようと奮闘中であった。

2019年に空き家を改修して、地域暮らしが体験できる施設「ロッキンビレッジ」を立上げた山下氏は、（一社）地域間交流支援機構の代表でもある。これまで、人口減少の進む日本各地で、企業のサテライトオフィス誘致や移住促進などの支援事業に携わってきた。現在はこの真鶴で、宿泊やコワーキングスペース、飲食提供の場を通じて、「ヨソモノとジモト」の交流の場の創出による地域の課題解決に精力的に取り組んでいる。

「草柳商店」は、代々地元で根ざす酒屋である。真鶴愛にあふれた4代目店主の草柳氏は、お

店での角打ちや、商店街での食べ歩きイベント、町の音楽フェスなどを企画してきた。个性的で人を暖かく迎え入れるその姿勢が、多くの真鶴ファンを生み出している。

「美の基準」とは

真鶴を訪れると、人の手が入った果樹園の風景や、風情ある港町の生活景観があり、町の温かみを感じる。真鶴にはバブル期のリゾートマンション乱開発を食い止めた、「美の基準」という景観条例があることを今回の訪問ののち知った。「美の基準」は、まちづくり条例の一部として1993年に制定され、まちづくりや建築にあたっての8つの基準とデザインコードが設けられている。ただしそれは具体的な数値ではなく、「世帯の混合」「店先学校」「小さな人だまり」など69個のキーワードで、守るべき町の文化や風土を表現しているのが大きな特徴だ。

これからの地域の在り方

多くの地域にとって高齢化や人口減少は大きな課題で、自治体は必死に移住促進に取り組んでいる。一方、無作為な移住促進は「地域DNA」や「地域免疫」とよべるような地域の個性や歴史を壊しかねない、と山下氏は懸念していた。

真鶴では過去に、リゾート開発やそれに伴う水資源の枯渇問題という町の課題と向き合う中で、地域資源を見つめなおし、住民にとっての暮らしの基準（アイデンティティ）を定義した。「美の基準」制定から30年がたった今、これまで守られてきた自然や生活風景、地域コミュニティが魅力となり、そこに価値を見出す人たちが増え、真鶴に関わりを持とうとしている。そこで「ヨソモノ」の目線や関わりがうまく「ジモト」の個性と融合し、さらなる新しい変化を生み出す力となるには、相互のコミュニケーションとその介在者の存在が重要であると考えている。今回の訪問を通じて、真鶴にはその動きが芽生え、大きなうねりとなりつつあるのを感じることができた。